



フィクションと現実：なぜわれわれはフィクション
を読むのか？：退任記念講義

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 福島県立医科大学看護学部 公開日: 2020-06-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 亀田, 政則 メールアドレス: 所属:
URL	https://fmu.repo.nii.ac.jp/records/2000620

退任記念講義

フィクションと現実：なぜわれわれはフィクションを読むのか？

Fiction and Its Actuality: Why we read fiction?

亀田 政則（福島県立医科大学名誉教授）

私の研究

私のこれまでの研究対象は(1)科学言語 (the language of science), (2)文学の言語 (the language of literature), そして(3)宗教言語 (religious language) の三つに類型化されます。ここでは、それぞれの言語的特質について、簡単に紹介いたしましょう。

- (1) 科学言語とは、端的に言えば、物言語 (reified language) です。例えば科学言語の代表格として「医学英語」と称するものがありますが、－英語では、English for Medical Purposes と表記します。Medical English という English は English language には存在しません。どうしてでしょうか。お考えになってみては？－これは観察された物や事象記述することを主な目的とする言語です。ふつう医学論文といわれているものは、観察された物や事象の記述内容の真理値が「真」である言明の集合体 (the set of semantically true statements) にほかなりません。

つまるところ、観察記述されている内容は「真」(true:1) か「偽」(false:0) かのいずれでしかないのですから、科学言語は AI (Artificial Intelligence) が処理するうえで、もっとも得意とする言語領域ということになります。AI は、やがて科学者にとって代わって、英語で論文を書くまでになるでしょう。とはいえ、科学者自身が英文の論文内容が分からなくてもよい、言語的に「なぜそうなるのか」を説明できなくてもよいということにはなりません。

- (2) 文学の言語は、こころの言語 (the language of mind) の一種です。この言語は人間の creative imagination が開拓する意味世界の礎となっています。フィクション、そして詩などが文学の言語が創造する世界の代表格です。文学の言語は、現代の人々の脳髓を席卷している実利性 (そんなことをしてお金になるの？いくら儲けられるの？) や有効性 (今すぐ効果があるの？何の役に立つの？) から離れて、自律した意味世界を創造します。

ところで、わたしたちのほとんどは、わたしたちが「現実」と呼び、そこに慣れ親しんで生きている世界が全てであると思いついて生きていますが、学問的に考えれば、いくつかある可能世界 (possible worlds) のひとつを生き延びるに過ぎません。文学の言語が創造する「実利性や有効性から離れて自律した意味世界」とは、「そのようにありえたかもしれない」「そのようにありえるかもしれない」可能世界の一つです。その世界が「立ち現れてくる」のは、もちろん、あなた (読者) のところにおいてです。

- (3) 宗教言語は、人間の「生き死に」を問う言語です。魂 (soul) の領域にある問題群に深く関わります。ふだん、凡庸に生きている存在の次元では直面しえない意味世界を開拓します。第一人称単数代名詞で表示される個々の「わたし」は、「経験しえない世界」から誕生し、「経験しえない世界」へとやがて消えてゆく時間的存在です。「わたし」の誕生に必然性はなかったものの、死は必然である。つまり、「わたし」もまたひとつの可能世界を生き延びる存在なのです。「私はナポレオンです」という文を考えてみればよく判ります。「ナポレオンです」という述語は、「わたし」という主語に必然的に帰属するものではありませんね。「わたしはカミュ」です、と言ってもよいわけです (なんだかコニャックの名称が続いてしまいました)。

終末期にあるクライアントは、「わたしはまじめに生きてきたのに、なぜこんな病気になって苦しみ、死んでゆかなければならないの？」「なぜ、このわたしなの？」「死ねば全て終わり？」「死ぬとしたら、生きてきたこの『わたし』

の意味はいったい何?」「死後の生は?」というような問いを問うと言われますが、そのような問いを通して、無自覚的にですが、宗教言語の領界に触れていることになります。このような問いへの対応は、-日本では寡聞にして存じませんが-世界の有数の大学病院や医療センター¹において spiritual care の名称でなされています。Health care の延長線上を辿ってゆきますと、spiritual care があります。もちろん、深刻な病によって存在の危殆に直面する以前に、「生死事大」「無常迅速」を自覚的に捉えて生きることの方が宗教言語の意義をより明らめるようになる、ということは言うまでもありません。

このように、人間は自らの存在のレベルに応じた言語世界 (thing → mind → soul) をもっていることがわかります。言い換えますと、人間は自分の存在のレベルに応じた言語使用を通して「見えてくる」多様な「意味世界」を生きているということになります。

今日の最終講義は、文学の言語についてです。フィクションとは? 現実とは? 読者とは? フィクションを読むことで読者に「立ち現れてくる世界」の様相とは? 英米の文学作品を手懸かりに探求します。

最終講義のアウトライン

はじめに

- 1.0 フィクションとは? : 辞書的意味 (Lexical Meaning)
- 2.0 システム化された強大なフィクション: マネー
- 3.0 交錯するフィクションと現実: 可能世界意味論 (Possible World Semantics)
- 4.0 読者とは? : 読者はどのような存在状況でフィクションを読んでいるのか?
- 5.0 フィクション: その現実性 (Fiction and Its actuality)
- 5-1. Jonathan Swift, Gulliver's Travel (1735) を読む.
- 5-2. Samuel Butler, Erewhon (1872) を読む.

むすびに

はじめに

最終講義の題名が「フィクションと現実: なぜわれわれはフィクションを読むのか」とあることに奇異の念を抱かれる方もいらっしゃると思います。それも、ますます専門化・特殊化してゆく医学や看護学を学び、研究する医科大学でお話するのでありますから。

しかしながら、文学のジャンルであるフィクションと医学との相互作用に注目した教育や研究は1972年のペンシルベニア大学医学部でのカリキュラムで始まり、1982年にはジョンズホプキンス大学から *Teaching Literature and Medicine* という学術雑誌が出版されるまでになり、現在に及んでいます。その背景理由には、

- ① 医科大学における科学中心主義教育の弊害
- ② 医学とケアリングにおける人間的な眼差しの重要性を軽視してきたことへの反省
- ③ 人間の想像力が生み出した文学と病との相互作用は、病に携わる人間を教育する上で無視できない²

といったことが挙げられます。

今日では、医学や看護学を学ぶための技術手段にはめぐまれてはいますが、反面、学生や研究者たちは臨床場面で出会うクライアントや一般社会生活を共にする他者を思いやり、人間の割り切れない複雑な感情³を理解するために必要不可欠な creative imagination の貧困に直面しています。このようななかでフィクションを読むことは、人間および人間

がおかれている状況を理解するために建設的な貢献をなしようと期待されています。

1.0 フィクションとは？：その辞書的意味 (Lexical Meaning)

- (1) L. fingere < fingo: v. to fashion, to form mentally, imagine, to pretend
- (2) the action of feigning (pretending that you have a particular feeling or that you are ill/sick, tired, etc.) or inventing imaginary incidents, existence, states of things, etc., whether for the purpose of deception, invention as opposed to fact/ a statement or narrative proceeding from mere invention. ⁴
- (3) [N-UNCOUNT] a type of literature that describes imaginary people and events, not real ones
- (2) [N-COUNT/ UNCOUNT] a thing that is invented or imagined and is not true ⁵

2.0 システム化された強大なフィクション：マネー

人間が作り上げたもので最も強大なフィクションとは何でしょうか？つまり、そもそもフィクションでありながら、私たちが「現実」と呼び棲み慣れている世界において、もっとも強大な力を振るっているものはいったい何でしょうか？それは、マネー (money) です。現代アメリカを代表する作家の一人、Paul Auster (1957-) は、マネーとはそもそもいかなるものなのかを、*Hand to Mouth: A Chronicle of Early Failure* (1998) という本のなかでみごとに抉り出しています。

Money is a fiction, after all, worthless paper that acquires value only because large numbers of people chose to give it value. The system runs on faith. Not truth or reality, but collective belief. And what would happen if that faith were undermined, if large numbers of people suddenly began to doubt the system?⁶

そうなのですね。マネーというフィクションを支えるシステムへの信仰が崩れてしまいますと、大きなトランクに札束を詰め込んで持っけていても、一個のパンを買えるかどうかにも怪しくなります。

フィクションという語は、ラテン語の「なにものかを装う」(to fashion) あるいは「なにものかであるふりをする」(to pretend) ことを意味する fingo < fingere に由来すると述べましたが、フィクションとしてのマネーは、これこれになにがしかの価値を有する「ふりをしている」わけです。もともと実体はない。フィクションとしてのマネーが実体の無いものであることは、ビットコインのような virtual currency (仮想通貨) の登場によってますます明らかになりました。しかし、フィクションとしてのマネーが社会システムとして機能している今、マネーは私たちの上に強大な力を振るい君臨する「見えざる神」のごとくになっていると言えましょう。

金貨に代表される hard money の時代、William Shakespeare (1564-1616) は、1604年から1606年にかけて *Timon of Athens* という戯曲を書きました。主人公はアテネに住まうタイモンという貴族ですが、彼はその気前のよさにつけ込まれ、やがて破産の憂き目に遭います。そのタイモンは金貨をして、「システム化されたフィクションとしてのマネー」が人間社会においてどのように働くものなのかを次のように語り、浮き彫りにします。

Gold? Yellow, glittering precious gold?

…Thus much of this will make

Black white, foul fair, wrong right,

Base noble, old young, coward valiant. [Scene 14, 25-30]⁷

後にカール・マルクス (1818-83) は、マネーというフィクションを生み出した人間が、逆にマネーによって疎外される、つまり逆に支配され、いかにマネーが人間の主人公になり、人間はその人間性を喪失してゆくのかを明らかにしてゆくこととなります。

Money は Mammon,⁸すなわち「神へと祭り上げられ、人生において最も重要なものであるかのようなもの」へと化

してゆきます。いわゆる Mammonism です。その現実をシニカルにかつ苛立ちを覚えながら、Modern Prayer という詩に刻んだのは David Herbert Lawrence (1885–1930) です。

Almighty Mammon, make me rich!
Make me rich quickly, with never a hitch
in my time prosperity! Kick those in the ditch
who hinder me, Mammon, great son of a bitch!⁹

3.0 交錯するフィクションと現実：可能世界意味論 (Possible World Semantics)

このようにフィクションとしてのマネーが私たちの存在を左右するほどの強大なシステムとなっていることを考えますと、「フィクションはフィクションであって、所詮それは現実ではない」という考え方は揺らいでいきます。フィクションは、わたしたちが「現実」と呼んでいる世界の一部なのです。

とすれば、そもそも「現実」とはなんでしょう？ 私たちがふだん「現実」と呼び、そこに住み慣れている「世界」は、論理的に考えますと、いくつかある「可能世界」(possible worlds) の一つにすぎません。つまり、「今このようにあるのとは違ったしかたで在りえたとしても」また「そのように考えてもべつに矛盾しない」世界と両立可能な世界に、フィクションの読者たるわたしたちが生きていることになります。

もちろん、いかなる可能世界においても、論理的に矛盾すること、つまり意味論的にみてもそれが「真」(true) とはならないようなことは成立しません。次のような文を考えてみましょう。

1. Hanako floats in the air and passes through the wall.

この文は、人間が人間であるかぎり、いかなる可能世界を考えても論理的に不可能であり、成立しない事態を述べています。つまり、わたしたちが現実と呼んでいる世界 W から指示言及できない出来事と言えましょう。端的に言えば、ノン・センス文です ($\neg \Diamond \exists x ((x \text{ is hanako} \wedge x \text{ floats in the air}) \wedge x \text{ passes through the wall})$).

2. Masanori pulled himself out of the water by lifting himself by the hair.¹⁰

という文で言い表されていることや、

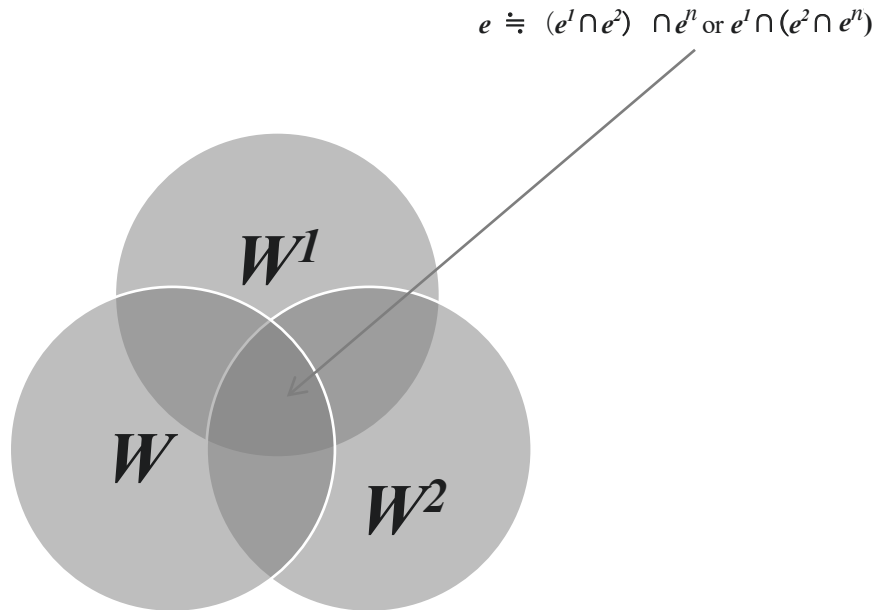
3. If I were a bird, I would fly to you.

というような英語学習で慣れ親しんできた文は、いずれも統語論的（語や句が文を形成するしかた）には構成可能な文ですが、意味論的には、すなわち「世界がそうでありえたかもしれない状態」、「いかなる可能世界を考えてもそれが『真』となる世界」は存在しません。それゆえ、これらもまた、すべてノンセンスです。¹¹もう少し詳しく、フィクションが描く可能世界について考えるために、つぎのような手続きを取ってみましょう。

- e は、われわれが「現実」と呼び、住み慣れている世界 W における出来事や状況である。（ e is an event or a state of affair in W , which we call our actual world and get used to living in.）
- e^1 は、フィクションの世界 W^1 で描かれている出来事や状況である。（ e^1 is an event or a state of affair described in a fictional world, W^1 .)
- e^2 は、フィクションの世界 W^2 で描かれている出来事や状況である。（ e^2 is an event or a state of affair described in a fictional world, W^2 .)
- e^n は、フィクションの世界 W^n で描かれている出来事や状況である。（ e^n is an event or a state of affair described in a fictional world, W^n .)

- e. もし W^1 における e^1 , W^2 における e^2 あるいは W^n における e^n が意味論的成立する出来事や状況であり、かつ W における e ときわめて類似した出来事や状況であるとすれば、かつそのかぎりにおいて、 e^1 あるいは e^2 , あるいは e^n は W において現実化されうる。このことが意味するのは、 W^1 あるいは W^2 , あるいは W^n は、われわれが現実と呼び住み慣れている世界 W と事実上繋がっているということである¹² (If and only if e^1 in W^1 or e^2 in W^2 or e^n in W^n is a semantically possible event or a state affair and has a strong resemblance to e in W , e^1 or e^2 or e^n in W^n may be actualized in W . This means: W^1 , W^2 and W^n are possible worlds, which are actually linked to W .¹³).

このことを図式化しますと、つぎのようになります (図表 1).



「フィクションの世界で述べられていること」と「わたしたちが現実と呼んでいる世界」とを貫いている関係、あるいはそれら二つの対応関係 (counterpart relation) において意味論的に成立する、どう考えても矛盾がないと思われる部分を発見することによって、フィクションの世界が絵空事ではなく、現実性の様相を帯びてわたしたちに立ち現れてきます。

さきほどの図表を使い、もうすこし足を踏み込んで考えてみましょう。1932年に出版された Aldous Huxley の *Brave New World* と1949年に出版された George Orwell の *Nineteen Eighty-Four* (この本は、トランプ大統領が誕生したとき、再び注目されるようになりました) が開披する可能世界、そして私たちが現実と呼んでいる世界との関係を考えてみましょう。

ハックスレイが creative imagination を駆使して創造した近未来社会は「全体主義社会」です。その社会は、Controller といわれる一握りの指導者たちによって管理統制されています。「個人」というものはもはや存在しません。個人よりも社会的安定性 (Community, Identity, Stability.¹⁴) が何にもまして重要と見なされる社会なのです。彼らの生活行動のすべてが監視下にあります。つらいこと、不快な現実と向き合いたくないときは、soma¹⁵ というドラッグを摂取します。それを服用することによって精神を高揚させ、心地よい幻覚に浸り、向き合いたくない現実を回避します。問題がある人間、つまり全体主義社会にとって不都合な者は、「治療」という名の矯正 (洗脳) を受けることになります。

Brave New World のなかで描かれている全体主義社会は、*Nineteen Eighty-Four* において描かれた全体主義社会と多くの点で共通しています。*Brave New World* と違う点のひとつは、全体主義体制を維持するために、国家は敵対していると思われている国々と (じつはその敵とは何なのか、誰も正確には知らないのですが) 絶えず戦争状態にあるとすることです。

このようなことは、よくよく思い巡らせば、わたしたちが現実と呼んでいる世界 W でも成立可能であり、現実化している事態ではないでしょうか？個人主義を唱ってきた英国では、国民の安全のためという名目で、いたるところに監視カメラが据え付けられています。中国はすでに強大な警察監視国家になっています。AI 付き監視カメラは、この数年で4億台くらいにまで設置されるとの見込みです。その AI 付き監視カメラを使って個人を特定し、その個人がどこを歩き、どこで何をいくらいで買い、誰と連絡を取り合っているのか、会話の内容は何だったのかまで特定されています。AI やインターネット・システムは、全体主義支配を強力に推し進める手段になっているわけです。また朝鮮民主主義人民共和国のように、－そこに「民主主義」は存在しているとは到底思えませんが－国家は「敵対している」と見なされている国々と絶えず戦争状態にある」と喧伝し、国民の統制を図っています。¹⁶

ハックスレイとオーウェルが創造したフィクションに共通する支配のシステムを単純化しますとつぎのようになります。

- ① 経済的・社会的混乱が起きる。
- ② 混乱に対処するため、権力の集中が起こり、全体主義的統制が必要となる。
- ③ 全体主義的統制を進める強大な権力を持つボス (political bosses) が生まれる。
- ④ ボスに奉仕するために国民は自らの自由を明け渡すか、強制されなくても、自己本能与相俟って全体主義の奉仕者となる。¹⁷

これは、「風が吹けば桶屋がもうかる」式の論証に似ていますね。

①～④は、ハックスレイの *Brave New World* (W^1) とオーウェルの *Nineteen Eighty-Four* (W^2) の可能世界において意味論的に成立する共通の出来事や状況 (e^1, e^2 で表示される) であり、かつ W における e ときわめて類似した出来事や状況であるとすれば、かつそのかぎりにおいて、 e^1 あるいは e^2 はわたしたちが現実と呼ぶ世界 W においても現実化されうると言えましょう。その「現実化されうる」部分が、さきほど挙げました図表のなかで、 W^1, W^2 そして W が交わる部分集合で示されるということになります。¹⁸

4.0 読者とは？：読者はどのような存在状況なかでフィクションを読んでいるのか？

では、読者とは？どのような存在状況なかで、読者はフィクションを読んでいるのでしょうか？読者もまた、ひとつの可能世界を生きている存在なのです。先ほど申しました、「私はナポレオンです」という文を考えてみればよく判ります。「ナポレオンです」という述語は、「わたし」という主語に必然的に帰属するものではありませんね。「わたしはカミュ」です、と言ってもよいわけです。つまり、「今存在しているように存在していなくてもよかった」し、論理的に考えれば、一人一人の「わたし」は生まれて来なくてもよかったし、そもそも「わたし」の誕生でさえ、なんら必然性はありません。しかし、今このように存在し、ひとつの可能世界を生きている。よくよく考えれば、これは、とても神秘的なことです。

たとえば、昨年12月1日、アメリカの元大統領、G. Herbert Bush 氏 (第41代合衆国大統領) が亡くなったとき、その息子である G. W. Bush 氏 (第43代合衆国大統領) が、

…the best dad a son or daughter could ask for¹⁹
息子や娘が望みうる最良の父親であった

と述べましたが、論理的に考えれば、自分がこの父親から生まれて来なければならなかった必然性はなかったものの、「あらゆる可能世界のなかで考えてみると、G. Herbert Bush 氏は、G. W. Bush 氏にとって最良の父親だった」ということとなります。

では、読者の存在状況はどのようなのでしょうか？読者は、自らが「現実」と呼び慣れ親しんでいるひとつの可能世界を

生きながら、フィクションを読んでいます。そしてフィクションが描き出す可能世界のように、世界がかくかくかくしかじかであったならば、自分の生き方や物事には違った意味世界があったかもしれない、あるいは、今自分が現実と呼んで住み慣れ、馴れ合って生きている世界はもっと良い方向に変貌を遂げたかもしれない等々と考えるのです。このことは、フィクションを読む読者の生き方は可塑的なものであり、新たな可能性へと開かれていることを明らかにするのです。

それでは、今まで述べてきましたことを、英国の古典的フィクション、Jonathan Swift, *Gulliver's Travel* (1735) と Samuel Butler, *Erewhon* (1872) をとおして確認してみましょう。*Gulliver's Travel* は今から284年前に、*Erewhon* は147年前に出版されました。そんなに古い時代のフィクションが今更何を語るのかと思う方もいらっしゃるでしょうが、物は試しです。

5.0 フィクション：その現実性 (Fiction and Its Actuality)

5-1. Jonathan Swift, *Gulliver's Travel* (1735) を読む。

ガリバーは航海の途上で、さまざまな国を訪問します。そのなかのひとつが「ラグナグ王国」です。驚くべきことに、そこには「ストラルドブラグ」といわれる「不死の人々」(Struldburgs or Immortals)²⁰が住んでいるのです！

人々は、ストラルドブラグが生まれるのはごく稀なことで、全くの偶然の結果 (a mere Effect of Chance)²¹にすぎないと言うのです。しかしながら、言うまでもなく、ストラルドブラグという存在は論理的に成立しませんね。「ストラルドブラグは生まれてくる」というわけですから、「生まれてくる」ものにはすべてその「始まり」と「終わり」があるからです。つまり、「生まれてくる」もので「不死なるもの」は存在しません。ストラルドブラグは、「ありえない」といういみで、純然たるフィクション (虚構的存在) ということになります。このことは、つぎのような論理的手続きを取ることによって、いっそう明らかになります。

- (i) すべての生まれたものには終わりがある。
- (ii) ストラルドブラグは生まれたものである。
- (iii) ストラルドブラグには終わりがある。

当初、ガリバーは、ストラルドブラグという存在を知ることによって、人間に必ずつきまとう禍 (死) から解放され、「絶えざる死の不安がもたらす心の重圧も暗澹も感ずることなく、精神の自由闊達を楽しめる」²²であろうし、くわえていかなる病も癒やしてくれる万能薬 (universal Medicine) の発見も目にすることができるのではないかと思い、ストラルドブラグの幸福状態を讃美します。²³

しかしながら、彼は、しだいにストラルドブラグが「死ぬに死ねないという絶望的な状況」(the dreadful Prospect of never dying)²⁴にあることに気づいてゆきます。ストラルドブラグは不死ではあるが不老ではないのです (Aging は人間が mortal であることのしるしなのですから、ここの論述の矛盾点がありますね)。老いてゆけばゆくほど生きる苦しみが増してゆくのです。ストラルドブラグは、やがて

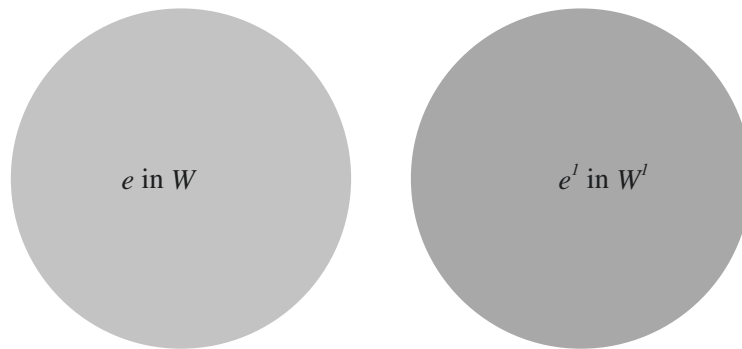
As soon as they have completed the Term of Eighty Years, they are looked on as dead in Law; their Heirs immediately succeeded to their Estates, only small Pittance is reserved for their Support;…²⁵

というありさまになるのです。「食べるには食べるが味わいを失い、好き嫌いも食欲も関係なく手当たりしだいに飲み食いするだけ」²⁶であり、記憶も曖昧になり、文章を読んでも頭から最後まで記憶がもってくれないありさまです。²⁷その容姿も崩れて醜くなってゆきます。²⁸さらに、「ある時代のストラルドブラグは別の時代のストラルドブラグの言っていることはもはや理解できなくなるのです」。そして、ガリバーはつぎのような結論に至るのです。

I grew heartily ashamed of the pleasing Visions I had formed; and though no Tyrant could invent a Death into which I would not run

with Pleasure from such a Life.²⁹

*Gulliver's Travel*にあるラグナグ王国で見聞きした世界で起きること (e^n in W^n) は、さきほどの論証 ((i)–(iii)) で明らかにされましたように、いかなる可能世界を考えても意味論的に成立しません。ということは、わたしたちが現実と呼ぶ世界 W にもリンクしないし、 W において現実化することもありえない。それゆえノン・センスです。



しかしながら、このフィクションは、ストラルドブラグという存在をとおして、「人間は生まれるやいなや死に始める」(As soon as a human [person] is born, he[she] begins to die.³⁰) 存在であること、いたずらに不老不死を追求する人間と長生き神話に対する「当てつけ」や「風刺」(allusion) になっています。「人間は死すべきものである。」この命題から逃れることはできない。その人間にとってたんなる長生き、あるいは必要以上の生物学的延命は必ずしも幸福へと帰結しない、と³¹やがてガリバーは、人間にとって「終わりがある」ことは「救い」でもあると自覚するに至ります。

みなさまのなかには、このことから、ドストエフスキーが『カラマーゾフの兄弟』に登場する大審問官の言葉を思い起こす方もいらっしゃることでしょう。

…the secret of human existence lies not only in living, but in knowing what to live for.³²

5-2. Samuel Butler, *Erewhon* (1872) を読む。

Erewhon とは、若き旅人が人里離れたところで偶然発見した、美しい国のことです (*Erewhon* を逆から読めばお判りになるように、*Nowhere* 「どこにもない国」です) が、なんということでしょうか、その国では、さまざまなもの・ことの価値観が転倒しているのです！

例えば、*Erewhon* では、病気はきわめて深刻な犯罪であり、反道徳的なことと見なされます (illness of any sort was considered in *Erewhon* to be highly criminal and immoral).³³ (英語の世界で、malady - mal : 前部連結形。「悪い」という意味 - は「病気」(disease) や「悪」(evil) を意味します。同様に、「悪性腫瘍」を表す malignance もまた「悪」(evil) と見なされることを考えてみましょう。人間には「健康であること」をモラル化する傾向があるのです。そしてそれは大きな問題を引き起こしているのです。) 病気になると裁判にかけられ、有罪宣告 (病気が悪であり、犯罪として認定される) を受けますと、刑務所送りとなります。そして、結局のところ、死に至ったとしても自業自得となるわけです。

このようなことは、わたしたちが「現実」と呼び、慣れ親しんでいる世界 W では考えられないと思われるかもしれませんが、しかしながら、 W において、重篤な病気の人や障害者は「何も役に立たない」「生きている価値がない」と見なされ、次々と殺されていったナチズム (全体主義的独裁政治) の時代などがあったこと、近年ではニコラス・ペルシュ (Nicholas Perruche) - 胎児のとき、風疹に感染してはいないと医師から判断されたものの、重度の障害をもって生まれ

たーとテリ・シアボ (Terri Schiavo) - 原因不明で卒倒し、大脳皮質に重篤な損傷を受けた状態で生きたーを巡る訴訟判決を見れば、病気や障害をモラル化し社会悪や犯罪と見なす可能世界 $W^{f'n}$ があるとして不思議ではありません。³⁴

しかしながら、*Erewhon* (W') のなかでもっとも注目すべきことは、「マシンと人間」との関係あるいは「マシンが人間にもたらす事態」(ここでは、それを e' としましょう) についてです。著者のバトラーは、イギリス産業革命の衝撃を目の当たりにした人間です。その衝撃を現代に喩えるなら、インターネットや AI が人間生活にもたらしている衝撃に似ています。彼は、人間が作った「非人間的なもの」が、いかに「人間的なもの」を席卷してゆくのかを見たのです。

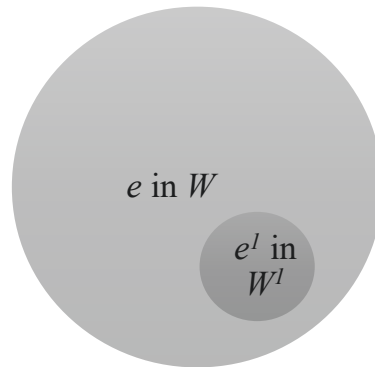
読みすすめてゆきますと、今から147年前にフィクションとしての *Erewhon* (W') が描き出した出来事や人間の状況 e' は、私たちが現実と呼ぶ世界 W で起きていること e に連繫し、より精妙なしかたで現実化してきていることが判ります。では、*Erewhon* のなかで、マシンと人間はどのように描かれているのでしょうか？

- a. There is no security against the ultimate development of mechanical consciousness, in the fact of machines possessing little consciousness now.³⁵
- b. And taken man's vaunted power of calculation. Have we not engines which can do all manner of sums more quickly and correctly than we can? ...In fact, wherever precision is required man flies to the machine at once, as far preferable to himself. Our sum engines never drop a figure,...; the machine is brisk and active, when the man is weary;...³⁶
- c. ...the servant (machine) glides by imperceptible approaches into the master;...they serve that they may rule.³⁷
- d. How many men at this hour are living in a state of bondage to the machines? ...Is it not plain that the machines are gaining ground upon us, when we reflect on the increasing number of those who are bound down to them as slaves, and of those who devote their whole souls to the advancement of the mechanical kingdom?³⁸
- e. ...what I fear is the extraordinary rapidity with which [machines] are becoming something very different to what they are at present...Should not that movement be jealously watched, and checked while we can still check it? And is it not necessary for this end to destroy the more advanced of the machines which are in use at present, though it is admitted that they are in themselves harmless?³⁹

こうした *Erewhon* における「マシンと人間」に関する記述は、端的に言いますと、つぎのような論証に落ち着きます。

- ① マシンは人間がもつ技能と処理能力を超えるようになることは明らかだ。(この場合の計算能力 (power of calculation) もまたマシンの information processing に収斂します。)
- ② マシンは人間がもつ技能と処理能力を超えるようになれば、人間はマシンの僕となる。
- ③ 人間はマシンの僕となることがないように、マシンの進歩的な部分は破壊すべきである。

Erewhon というフィクション W' で描かれた事態 e' は人間が将来直面するディストピア (dystopia: 暗黒世界) そのものですが、この事態は論理的に考えてみても成立しうる可能世界です。もし W' における e' が意味論的成立する出来事や状況であり、かつ W における e ときわめて類似した出来事や状況であるとすれば、かつそのかぎりにおいて、 e' は W において現実化される。このことが意味するのは、 W' は、われわれが現実と呼び住み慣れている世界 W と事実上繋がっているということです。集合図で示しますと次のようになりましょう。



フィクションとしての *Erewhon* (W^l) に描かれた人間とマシンとの関係 e^l を、わたしたちが現実と呼ぶ世界 W のなかで再解釈するとつぎのようになることでしょう。

…as machines become more and more intelligent, people will let machines make more and more of their decisions for them, simply because machine-made decisions will bring better results than man-made ones. Eventually a stage may be reached at which the decisions necessary to keep the system running will be so complex that human beings will be incapable of making them intelligently. At that stage the machines will be in effective control. People won't be able to just turn the machine off; because they will be so dependent on them that turning them off would amount to suicide. …control over the large systems of machines will be in the hands of a tiny elite - just as it is today, but with two differences. Due to improved techniques the elite will have greater control over the masses; and because human work will no longer be necessary the masses will be superfluous, a useless burden on the system. … anyone who may become dissatisfied undergoes “treatment” to cure his “problem.” …These engineered human beings may be happy in such a society, but they most certainly will not be free.⁴⁰

このように述べているのは、テオドール・カジンスキー (Theodore Kaczynski, 1942-)、あの Unabomber です。彼は、数学に関しては神童でした。彼はハーヴァードで数学を学び、カリフォルニア大学バークレー校の助教授を務めました。マシンを「人間を非人間的なものへとおとしめるシステム」と捉え、それを開発する大学研究機関や物流ネットワークシステムの起点となる空港を爆破し、多数の死傷者を出しました。

彼が取った手段は、皮肉なことに、「非人間的なもの」として責められるべきものです。しかしながら、あらゆる先入観を捨てて読んでみますと、自らが作り出したマシンによって、確実に「非人間的な」道をたどっている人間の未来を明確に見て取った人物であると思われまふ。⁴¹そして彼が W において述べていることは、今から147年前に書かれたフィクションである *Erewhon* (W^l) において描かれている世界と同調しています。つまり *Erewhon* で描かれたた可能世界は、それはたしかに人間の creative imagination の所産でありましたが、わたしたちが現実と呼ぶ世界 W と交錯している、あるいは着々と現実の一部となって、現実世界 W を構成しているとも言えまふ。

では、わたしたちはどうすべきなのか？今日の事例で言えば、AI とデータ駆使型のコンピューター・システムに象徴されるマシンの使い方そのものを民主化 (democratize)⁴² するために、真剣に動き出さなくてはならないことは明白でしょう。*Erewhon* のようなフィクションが読者に提示する可能世界は—それが「わたしたちが現実と呼ぶ世界」と深く交錯していればいるほど—読者のわたしたちをそのような行為へと駆り立てるのです。

むすびに

このたびの最終講義では、文学の言語に端を発して、「フィクションと現実」についてお話いたしました。本日ここにお出かけくださいましたみなさまが、「フィクションとは?」「現実とは?」「読者 (すなわちフィクションを読む

この『わたし』とは？」「フィクションを読むことで読者に『立ち現れてくる世界』の様相とは？」などなどについて考えるための「よすが」となれば嬉しく思います。ご静聴ありがとうございました。

*この論考は福島県立医科大学における私の「退任記念講義」（2019年3月4日）の原稿に加筆・補正を施したものです。

- 1 Yale New Haven Hospital, Maryland University Hospital, Harvard Medical School など、枚挙に暇がない。
- 2 勝井伸子・木村洋子：病と文学：カリキュラムへの提言，奈良県立医科大学医学部看護学科紀要，1，76-84，2005。
- 3 病を抱えるクライアントを含め，人間がもつ感情は割り切れないものである。このことは，AIにはもっとも理解不能な領域であり，たとえ AI が *I know how you feel.* と言うような文を音声装置をもって発話したとしても，人間がもつ感情や意味を理解してのことでない。
- 4 The Oxford English Dictionary, V, 872, Clarendon Press, 2001.
- 5 Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English, 573, Oxford Univ. Press, 2015.
- 6 Auster. P: Hand to Mouth, A Chronicle of Early Failure, 39, Faber and Faber, 1988.
- 7 Shakespeare. W: Timon of Athens, 268, (Wells. S. ed), Oxford Univ. Press, 2004.
- 8 Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English, 945, Oxford Univ. Press, 2015.
- 9 The Completed Poems of D. H. Lawrence, 584, Penguin Books, 1986.
- 10 Allwood J. et al: Logic in Linguistics, 47, Cambridge Univ. Press, 1997.
- 11 1. は $\neg \diamond \exists x(x \text{ is masanori} \wedge x \text{ pulls himself out of the water by lifting himself by the hair.})$: It is impossible that Masanori pulls himself out of the water by lifting himself by the hair. 3. は $\neg \diamond \forall x(x \text{ is I} \wedge x \text{ is a bird}) \rightarrow x \text{ will fly to you}$ となる。
- 12 つまり，何かの意味論的に成立可能であることとそれについて言明されたことが「真」であることは同一であると考えても矛盾しない。私の見解を David Lewis の見解 (Truth in Fiction, Philosophical Papers, 270, Oxford Univ. Press, Oxford, 1983) に沿って翻訳してみると，つぎのようになる。「フィクション f において e 」という文がトリヴィアル（くだらないこと）ではなく『真』であるのは， e が事実として語られかつ e が『真』であるようなある世界が， f が事実として語られていながら e が真でないようなどんな世界よりも，全体的に見て，われわれが現実と呼んでいる世界とより酷似しているとき，かつそのときのみである (A sentence of the form "In the fiction f , e is non-vacuously true iff some world where f is told as known fact and e is true differs less from our actual world, on balance, than does any world where f is told as known fact and e is not true).
- 13 ここでは David Lewis (Truth in Fiction, p. 267f) が言及している「物語に合致する貫世界同定概念」(a notion of trans-world identity for stories) と「対応関係」(counterpart relation) を念頭に入れている。また， W そして W' , W^2 , W^n との間にあるアナロジカルな関係にも注目したい (Lewis. D: Counterfactuals, 84-95, Blackwell, 1973)。
- 14 Huxley. A: Brave New World, 5f, Vintage, 2004.
- 15 Ibid., 46-47et al. Cf. 'Christianity without tears - that is what soma is' (210).
- 16 Kameda M: Language and the Inhuman: A Linguistic Approach to George Orwell's Nineteen-Eighty Four, The Bulletin of the Center for Integrated Humanities and Sciences, 3, 1-10, 2014.
- 17 Huxley. A: Brave New World AND Brave New World Revisited, 8-11, Harper, 2005. わたしたちが「便利」という言葉のもとに使用しているインターネット・システム，ソーシャル・ネットワーク・システム (SNS) は，確実に社会の全体主義化を推し進めるための強力な手段になっている。そしてそのシステムから離れて生きることを困難にしている。
- 18 同様なことは Zamyatin. Y: We (1924), Bradbury. R: Fahrenheit 451 (1954), Atwood. M: The Handmaid's Tale (1998) などにも見出すことができる。
- 19 CBS News (December 1, 2018)
- 20 Swift. J: Gulliver's Travel, 193, Oxford Univ. Press, 2005.
- 21 Ibid., 193.
- 22 富山太佳夫訳：「ガリバー旅行記」徹底注解（本文篇），219，岩波書店，2013。以下，日本語での引用は基本的に同書に依拠した。
- 23 Op. cit., Swift. J: Gulliver's Travel, 194.
- 24 Ibid., 197.
- 25 Ibid., 198.
- 26 Ibid., 198.
- 27 Ibid., 198.
- 28 Ibid., 199.
- 29 Ibid., 199.
- 30 Kierkegaard. S: Eighteen Unbuilding Discourses (tr, by Hong E. V. & Hong E. H.), 28, Princeton Univ. Press, 1990.
- 31 自分のクローンを作成し，そのクローンに自分の記憶を移し替えることで不死なる自分を確保しようと夢見る科学者もいるが，それは新たなフランケンシュタインを作り出しに等しい。しかしながら，そのフランケンシュタインはやがて「自分とは，いったい誰なのか？」(Who was I? What was I? Whence did I come? What was my destination?) という問題に苛まれるようになるであろう

- (Shelley, M: Frankenstein, 131, 123, cf. 132-3, Penguin Books, 2003).
- 32 Dostoevsky, F: The Karamazov Brothers, 319, Oxford Univ. Press, 2008.
- 33 Butler, S: Erewhon, 131, 123, cf. 132-3, Penguin Books, 1985.
- 34 Against Health: How Health Became New Morality, (Metzel, J. M & Kirkland, A. eds), New York Univ. Press, 2010. (細澤仁他訳: 不健康は悪なのか: 健康をモラル化する世界, 226-227, みすず書房, 2015) におけるトビン・シーバース (Tobin Siebers) の論考「苦痛の名のもとに」を参照されたい.
- 35 Op.cit., Erewhon, 199.
- 36 Ibid., 205.
- 37 Ibid., 206.
- 38 Ibid., 203, cf. 207.
- 39 Ibid., 203.
- 40 Kaczynski, T: Industrial Society and Its Future, The New York Times and The Washington Post, n. 173-4, 1995. このことは, Joy, B: Why the future doesn't need us, WIRED, April, 2000. によって知った.
- 41 しかしながら, 一方では, AI のようなマシンは人間を凌駕し, 人間と融合し, 人間は生物学的次元を超えてゆけるようになり, やがて人間はロボットになるか, あるいはロボットと融合するかのどちらかになる. 人間はかくして不死の存在になると考えるラディカルな未来学者もいるが (Kurzweil, R: The Singularity is Near, 194, cf. 30, Penguin Books, 2006), どう考えも, デイストピアに人間の明るい未来を見ているようにしか思われない.
- 42 Cave, S: Save us from a Kafkaesque future: we must democratize AI, The Gurdian, 4 January 2019.

補記: 退任記念講義では田中明夫准教授 (医学部言語学分野) から以下のような「傾聴し, 再考するに値するご意見」をいただきました.

フィクションの世界 (W') と現実世界 (W) との関係は, 集合論的な表記以外にも, W' から W への類似性に基づく写像という表記もできると思います. 共通部分である出来事 e' が出来事 e に写像されます (W' のすべての要素が W に写像されるわけではありません). その際, e の内部構造 (因果関係, 論理, 推論等) は写像先の e でも保持されます (保持されるものが写像されるとも言えます). この構造が保持されるということは, 先生のあげられたハックレイとオーウェルの作品に共通してみられる支配のシステム①~④や *Erewhon* の「マシンと人間」に関する記述①~③が現代社会にも当てはまるということも説明できます.

